

病害虫発生予察情報予報第9号（12月の予報）

佐賀県

目次

1. 12月の病害虫	1
2. 気象概要	2
3. 予報の内容・根拠等について	2
4. 12月の予報	
野菜（イチゴ、ナス、キュウリ、トマト）	3
花き（キク）	10
5. 病害虫診断状況	13
6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫	14
7. 農薬の適正使用について	15

今月のトピックス

イチゴうどんこ病が多発生しています。果実での発生を防ぐため、防除を徹底しましょう。

1. 12月の病害虫（予報で対象とした病害虫の中から抜粋）



ミナミキイロアザミウマ（左写真）が媒介するMYSVによるキュウリ黄化えそ病（右写真）



ナスのアザミウマ類による被害（果実）

キクの白さび病

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085

2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成26年11月25日 福岡管区気象台発表】

12月 平年に比べ曇りや雨または雪の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の向こう1か月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

上記の気象予報（確率予報）の内容について、本文中では便宜上、「気温やや高い」、「降水量やや多い」と簡略的に表現しています。

12月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	40	40
降水量	20	40	40

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
12月の平均気温	7.6℃	-0.2℃ ~ +0.6℃
12月の降水量	47.7mm	66% ~ 118%

3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量（平年比）

○予報の発生量は平年（佐賀県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査時の各作物の生育状況の写真を掲載しています。

4. 12月の予報

野菜

【概要】

作物名	病害虫名	発生量		病害虫防除の てびき記載頁	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	多	多	188～191	平成26年10月29日付病害虫発生予察注意報第7号参照
	灰色かび病	並	並	191～193	
	ハダニ類	やや多	多	199～200	
	アブラムシ類	並	並	204～205	
ナス	すすかび病	並	並	234～235	
	灰色かび病	並	並	232～233	
	菌核病	並	並	235	
	アザミウマ類	やや少	並	244～245	
	コナジラミ類	やや少	並	243	
	ハモグリバエ類	やや少	並	246	
キュウリ	べと病	やや多	多	166～168	
	うどんこ病	並	並	173～175	
	褐斑病	少	並	170～172	
	アザミウマ類	やや少	並	148～149、183～184	
	コナジラミ類	並	やや多	145～147、181～182	
トマト	灰色かび病	並	並	210～212	
	葉かび病	並	並	216～217	
	コナジラミ類	多	多	145～147、219～222	
	ハモグリバエ類	やや少	やや少	154～155、223	

【特記事項】

【イチゴ】

- イチゴうどんこ病の発生が多い。果実での発病を防ぐため、定期的な防除を徹底する。
(平成26年10月29日付病害虫発生予察注意報第7号参照)。また、次年度親株についても防除を徹底し、春季の発生を抑える。
- ハダニ類の発生がみられる場合には早急に防除を行う。特に、天敵を用いて防除を行う圃場では、防除を徹底し、ハダニ類の発生が認められない程度に密度を抑えてから天敵を導入する。

【施設果菜類（ナス、キュウリ、トマト等）共通】

1. コナジラミ類やアザミウマ類は、多発生すると防除が困難であることから、発生初期から防除を徹底する。圃場においてこれらが媒介するトマト黄化葉巻病・黄化えそ病やキュウリ黄化えそ病・退緑黄化病等のウイルス病の発生がみられる場合には、発病株は伝染源となるため早急に抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。
2. 病害発生防止のため、こまめな換気や循環扇を活用するなどして、適切な湿度管理を行い、結露時間の短縮に努める。

【アスパラガス】

1. 褐斑病等の次作への伝染源対策として、栽培終了後に刈り取った茎葉は必ず圃場外へ持ち出して処分する。さらに、土壌表面を焼くなどして病気や害虫の圃場内での越冬を防止する。

イチゴ（本圃）

（巡回調査：11月17日～20日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

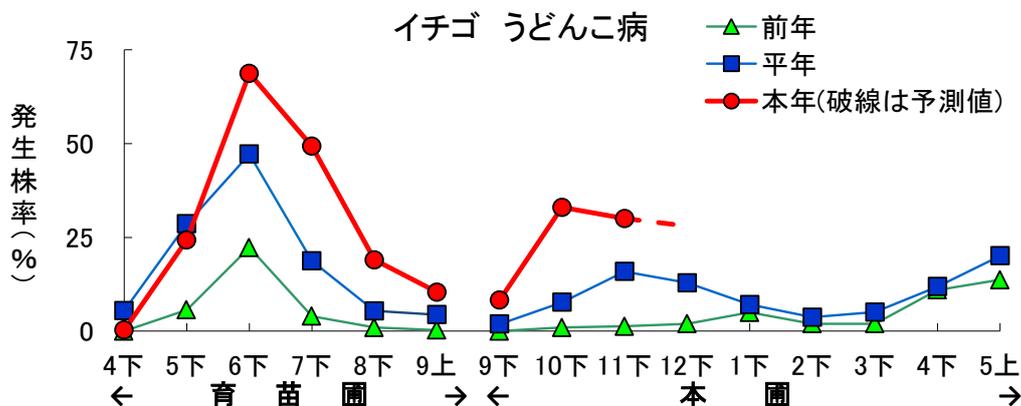
発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は30.0%（平年15.9%、前年1.3%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±～+〉
- (2) 病害虫防除員の調査(4圃場)では、1圃場で発生がみられ、発生株率は1.0%である。〈±〉
- (3) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（降水量やや多：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏にも葉液が十分かかるように散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 詳細な防除対策は平成26年10月29日付病害虫発生予察注意報第7号を参照する。



2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

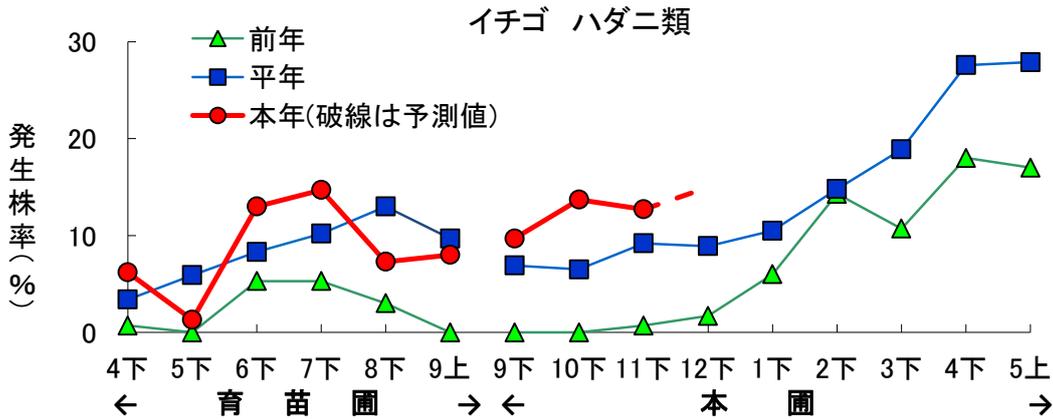
(1) 巡回調査では、寄生株率は12.7%（平年9.2%、前年0.7%）であり、平年並で前年より多い。〈±〜+〉

(2) 病害虫防除員の調査（4圃場）では、4圃場とも寄生が見られ、寄生株率は13.5%である。〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



ナス（促成）

（巡回調査：11月17～21日）

1. すずかび病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年0.4%、前年1.3%）。〈-〜±〉

(2) 病害虫防除員の調査（5圃場）では、1圃場で発生がみられ、発生株率は2.0%である。〈+〉

(3) 気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±〜+〉（降水量やや多：±〜+）

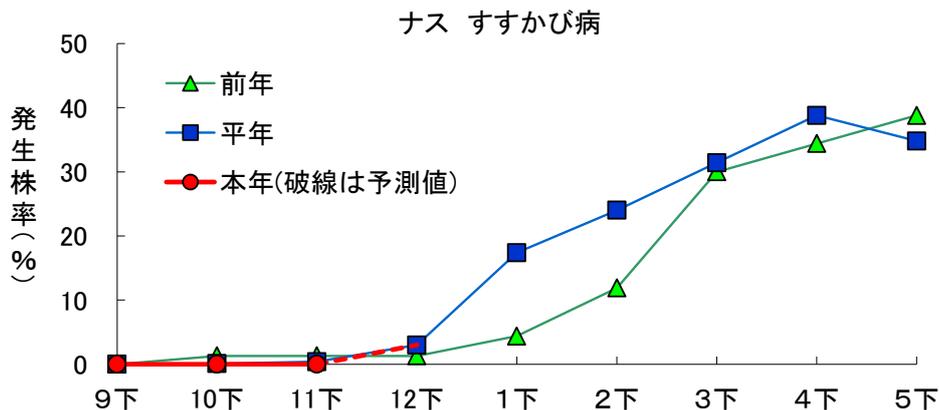
3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生初期からの防除を徹底する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



巡回調査時の生育状況



2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

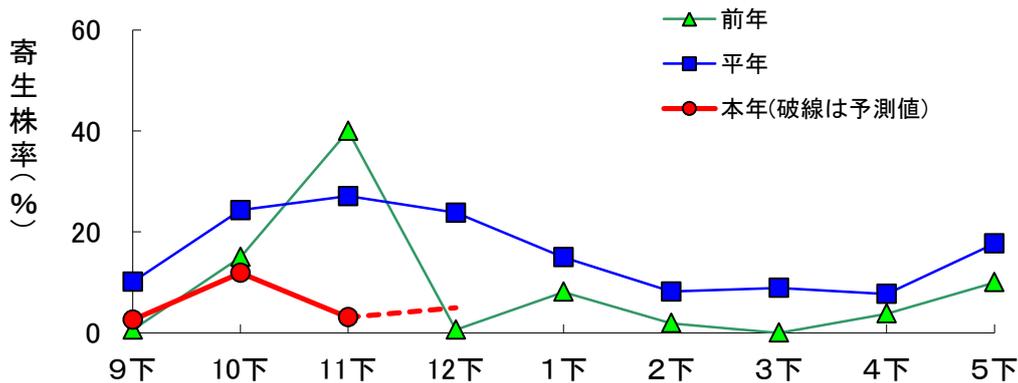
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は3.1%（平年27.1%、前年40.0%）であり、平年及び前年より少ない。〈－〉
- (2) 病害虫防除員の調査（5圃場）では4圃場で寄生が見られ、寄生株率は25.0%である。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス アザミウマ類



3. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

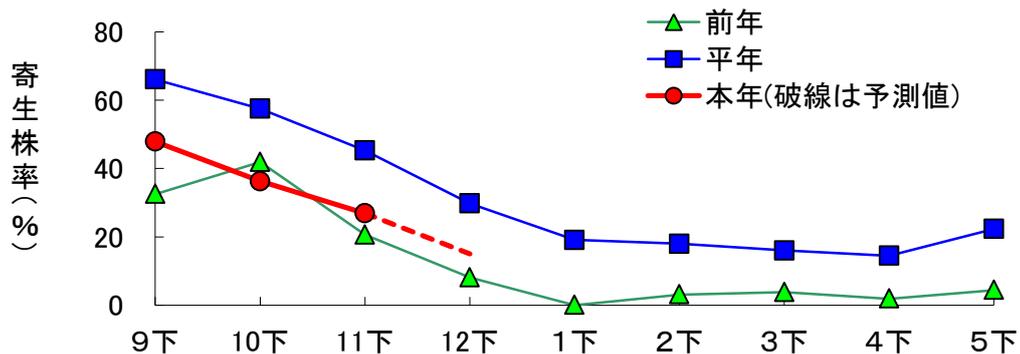
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は26.9%（平年45.3%、前年20.6%）で、平年よりやや少なく前年並である。〈－～±〉
- (2) 病害虫防除員の調査（5圃場）では3圃場で寄生が見られ、寄生株率は7.0%である。〈－〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内の密度を下げるため、幼虫寄生葉は可能な限り除去して、施設外へ持ち出して適切に処分する。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス コナジラミ類



4. ハモグリバエ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、食害株率は17.5%（平年37.9%、前年11.9%）で、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉

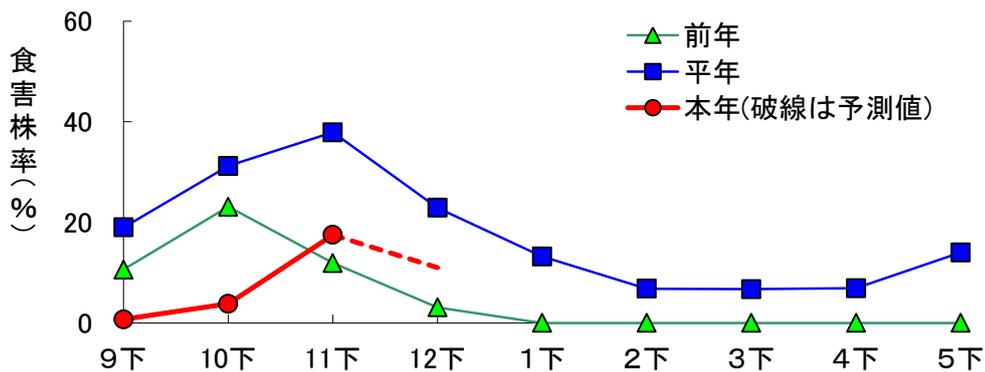
(2) 病害虫防除員の調査（5圃場）では食害は見られていない。〈-〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス ハモグリバエ類



キュウリ

(巡回調査：11月19日～20日)



巡回調査時の生育状況

1. べと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

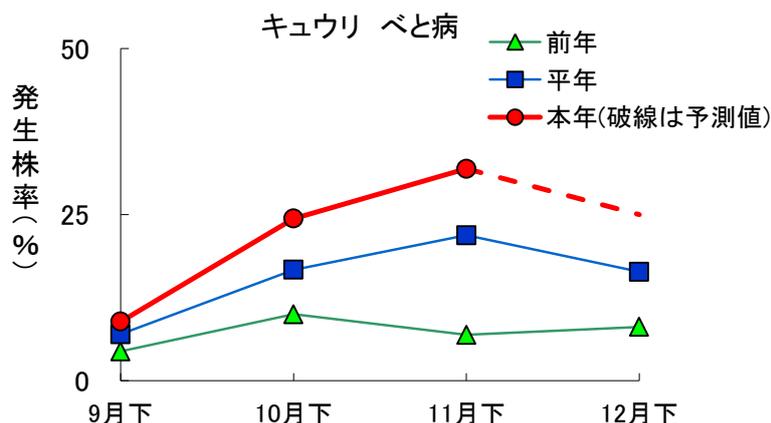
(1) 巡回調査では、発生株率は31.9%（平年21.9%、前年6.9%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±~+〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±~+〉（降水量やや多：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

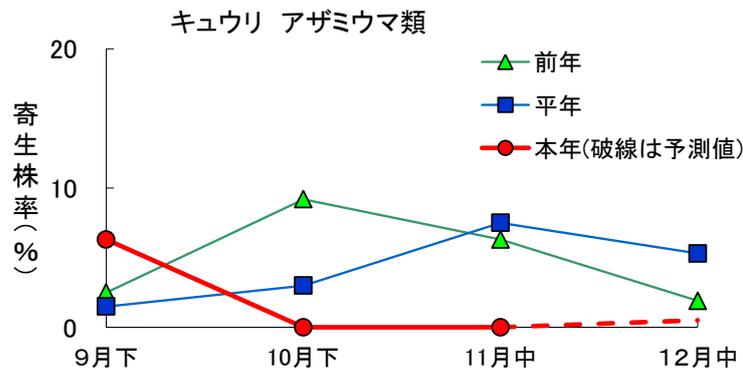
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生を認めていない（寄生株率：平年7.5%、前年6.3%）。〈-~±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、発生初期からの防除を徹底する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



トマト

(巡回調査：11月17日～20日)



巡回調査時の生育状況

1. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年0%、前年0%）。〈±〉

(2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、発生を認めていない。〈±〉

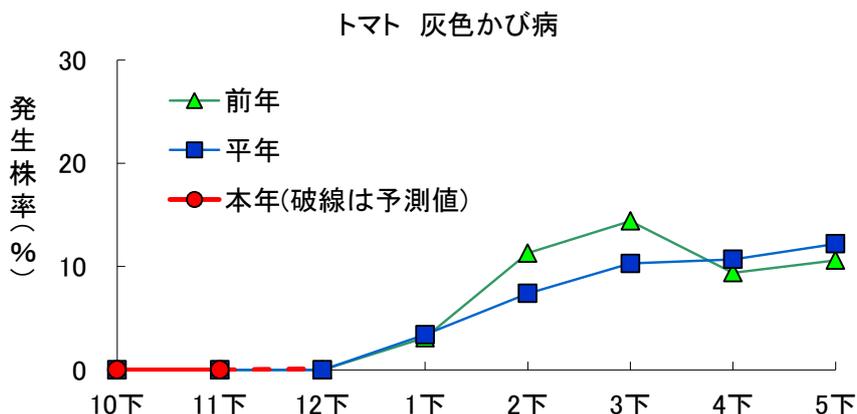
(3)気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±~+〉（降水量やや多：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1)発病葉は除去し、発生初期からの防除を徹底する。

(2)こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。

(3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は10.0%（平年4.3%、前年1.3%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

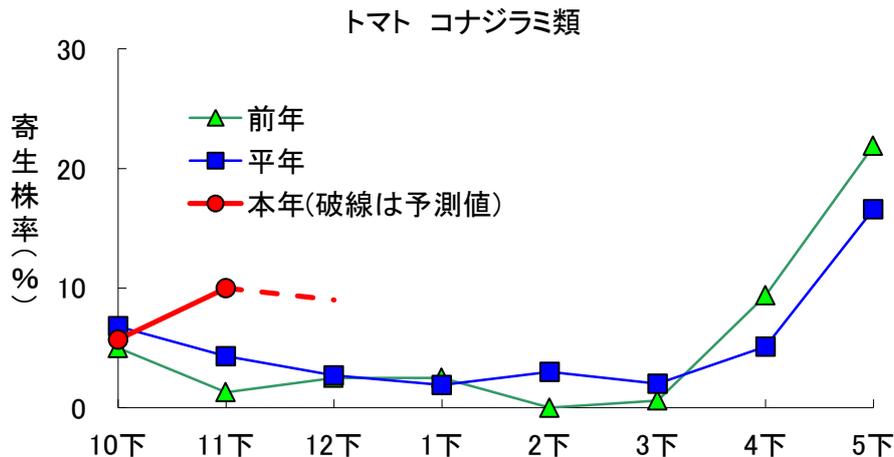
(2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、3圃場で寄生が見られ、寄生株率は3.3%である。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) コナジラミ類はトマト黄化葉巻病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。

(2) 幼虫の寄生が多い葉は除去処分し、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



3. ハモグリバエ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

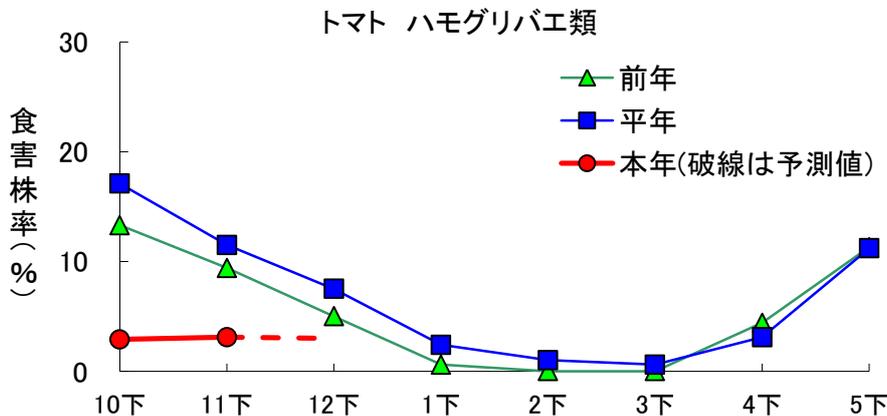
(1) 巡回調査では、食害株率は3.1%（平年11.5%、前年9.4%）であり、平年及び前年よりやや少ない。〈-〜±〉

(2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、4圃場で食害が見られ、食害株率は10%である。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫寄生葉は除去し、施設外へ持ち出して処分する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



花き

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびきの記載 ページ	備考
		平年比	前年比		
キク (年末出荷 タイプ)	白さび病	やや多	多	343～344	
	アザミウマ類	並	やや多	348～350	
	アブラムシ類	やや多	やや多	346～347	
	ハダニ類	やや少	少	347～348	
	ハモグリバエ類	やや少	並	351	
野菜・花き共通	チョウ目害虫	並	並	350	

【特記事項】

1. 白さび病は発病してからでは防除が難しいため、薬剤の定期的な散布による予防防除を行う。
2. アザミウマ類はキクえそ病、茎えそ病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。また、これらのウイルス病が圃場内で発生している場合は、伝染源となるため、発病株は抜き取り、圃場外で適切に処分する。

キク

(巡回調査：11月17～21日)



巡回調査時の生育状況

1. 白さび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は9.0%（平年0.7%、前年0%）であり、平年及び前年より多いが、多発生圃場は一部に限られる。（±～+）

(2) 気象予報ではやや多発生の条件となっている。（±～+）（降水量やや多：±～+）

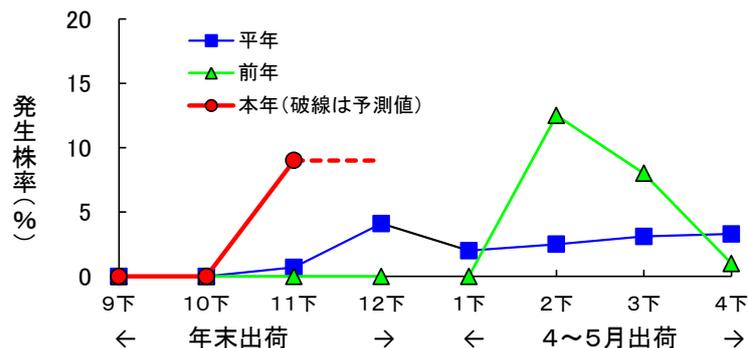
3) 防除上注意すべき事項

(1) 発病してからでは防除が困難となるため、薬剤の定期的な予防散布に努める。

(2) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるように散布する。

(3) 施設内が多湿にならないように換気を図る。

キク 白さび病



2. アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマ）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

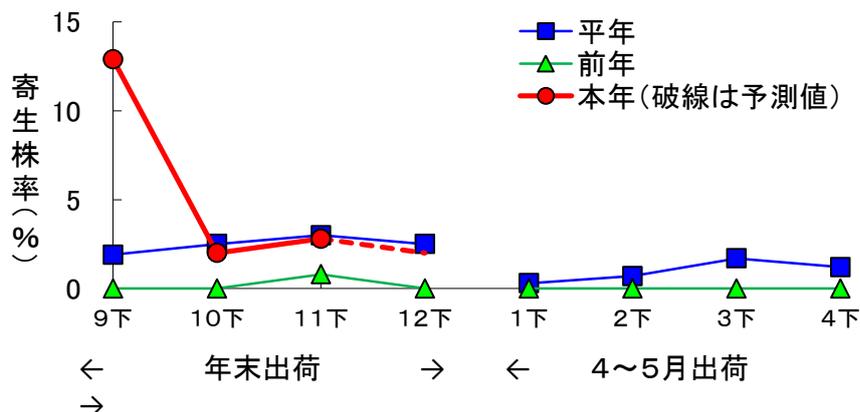
(1)巡回調査では、寄生株率は2.8%（平年3.0%、前年0.8%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)発生初期からの防除を徹底する。

(2)圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。

キク アザミウマ類



3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

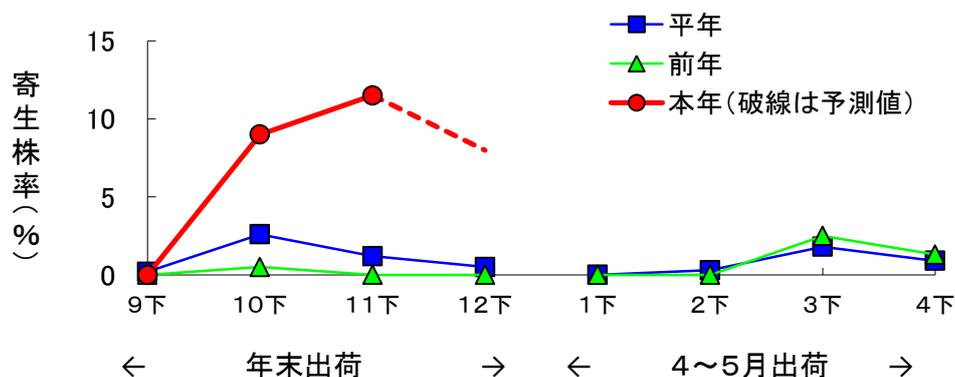
(1)巡回調査では、寄生株率は11.5%（平年1.2%、前年0%）であり、平年及び前年より多いが、多発生圃場は一部に限られる。〈±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)発生初期からの防除を徹底する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

キク アブラムシ類



4. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

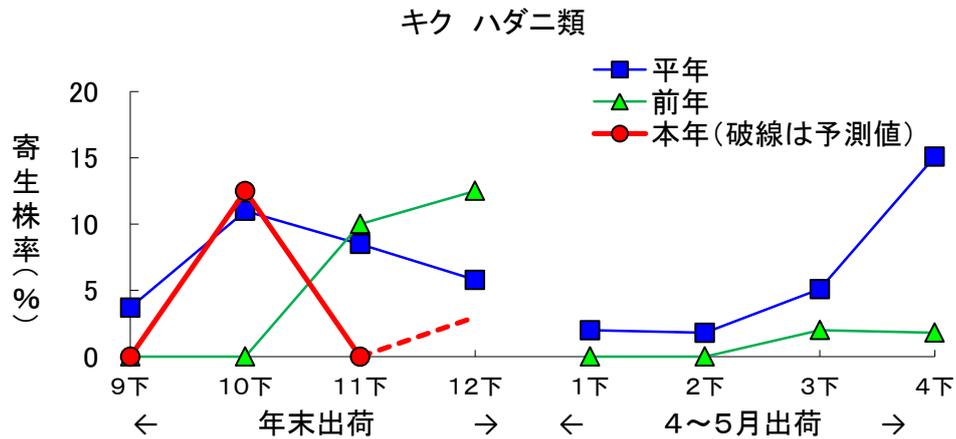
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生を認めていない（平年8.5%、前年10.0%）。〈－〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



5. 病害虫等診断依頼状況

平成26年10月21日～平成26年11月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

作物名		依頼件数	診断結果(件数)
普通作	水稲	1	いもち病(1)
	大豆	1	アズキノメイガ(1)
	計	2	
	イチゴ	35	炭疽病(6)、疫病(9)、萎黄病(10)、炭疽病と疫病の混発(2)、炭疽病と萎黄病の混発(1)、疫病と萎黄病の混発(1)、粘菌類(1)、ヒメジウジナガカメムシ(1)、生理障害等(4)
	キャベツ	2	根朽病(1)、生理障害等(1)
	キュウリ	2	褐斑病(1)、生理障害等(1)
	小ネギ	2	生理障害等(2)
	ダイコン	2	生理障害等(2)
	タマネギ	12	疫病(1)、細菌による葉枯症状(1)、苗立枯症(2)、生理障害等(8)
	トマト	2	黄化えそ病(1)、生理障害等(1)
	ブロッコリー	3	黒腐病(1)、生理障害等(2)
	ハウレンソウ	2	白斑病(1)、生理障害等(1)
	レタス	3	チョウ目幼虫による食害(1)、生理障害等(2)
	レンコン	1	レンコンネモグリセンチュウ(1)
	ワサビ菜	1	生理障害等(1)
	計	67	
花き	シクラメン	1	萎凋病(1)
	トルコギキョウ	3	株腐病(1)、生理障害等(2)
	バラ	2	生理障害等(2)
	計	6	

**合計： 17 作物
75 件**

内訳

糸状菌による病害	: 39件
細菌による病害	: 2件
ウイルス・ウイロイドによる病害	: 1件
害虫類	: 3件
線虫類	: 1件
生理障害等	: 29件
合計	75件

6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に10月25日～11月25日までに発表されたもの

<u>警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）</u>				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
佐賀県	注意報	2014/10/29	イチゴ	うどんこ病
山口県	注意報	2014/11/04	イチゴ	うどんこ病

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

<u>特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）</u>			
発信元	日付	作物	内容
			発表はありませんでした。

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

<u>技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）</u>			
発信元	日付	作物	内容
大分県	2014/11/01	イチゴ	うどんこ病、ハダニ類の防除について
長崎県	2014/11/18	キュウリ	アザミウマ類の防除対策について

注：太字は佐賀県で発表されたものを示す

7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

農薬を使用する前に、ラベルの内容を確認しましょう！

- ①使用できる作物か？
- ②使用濃度は？
- ③使用時期は？（いつまで散布できるか）
- ④総使用回数は？（何回まで散布できるか）

みらんばよ！



ラベルで作物名を確認する時には…

ラベルに個別の作物名がない場合でも、作物グループ名で登録の作物名があれば、そのグループに含まれる作物に使用できます。

農薬の適用作物名(一部抜粋)

大グループ作物名は、下表の作物以外に、稲、麦類、雑穀類、果樹類、きのこ類、飼料作物、花き類・観葉植物、樹木類、芝があります。

大グループ作物名 ①	中グループ作物名 ②	個別の作物名 ③	収穫部位 (時期)
野菜類	うり類 (漬物用)	赤毛ウリ、しろうり、とうがん、はやとうり、ゆうがお、食用へちま、食用ひょうたん	果実
		漬物用すいか、漬物用メロン、漬物用まくわうり	果実 (未成熟のもの)
	なばな類	おおさきな、オータムボエム、かきな、くきたちな、さいしん、つぼみな、摘菜花、なばな、のらぼうな、はなっこりー、みずかけな、めいけな 他	莖葉及び花蕾
	とうがらし類	甘長とうがらし、かぐらなんばん、きだちとうがらし、ししとう、とうがらし、ハバネロ、ピカンテ	果実
	非結球 あぶらな科 葉菜類	あざみな、かほくな、からしな、ケール、こまつな、さんとうさい、しろな、タアサイ、たいさい、たかな、チンゲンサイ、長崎はくさい、のぞわな、みぶな、ひろしまな、みずな、ルッコラ、わさびな 他	莖葉 (花茎がのびだす前のもの)
	非結球レタス	サラダ菜、立ちちしゃ、美味タス、リーフレタス 他	莖葉
	しそ科 葉菜類	しそ、えごま(葉)、オレガノ、セージ、タイム、バジル、はっか、レモンバーム、ローズマリー	莖葉
	せり科 葉菜類	せり、みつば、きんさい、コリアンダー(葉)、セルリー、チャービル、ディル(葉)、パセリ、フェンネル(葉)、にんじん(葉)*	莖葉 (*:若い葉を収穫するもの)
	豆類 (未成熟)	えだまめ、さやいんげん、さやえんどう、実えんどう、未成熟ささげ、未成熟しかくまめ、未成熟そらまめ、未成熟なたまめ、未成熟ふじまめ	さや付き豆 (未成熟なもの)
豆類 (種実)	—	あずき、いんげんまめ、えんどうまめ、ささげ、そらまめ、だいず、なたまめ、ふじまめ、べにばないんげん、らっかせい	種子 (成熟した種子)
いも類	—	ばれいしょ、かんしょ、きくいも、こんにゃく、さといも、はずいも(塊茎)、みずいも、やまのいも、ヤーコン、アメリカホドイモ	塊根又は塊莖

適用作物に関する登録の仕組みと注意

農薬は、個別の作物③を登録する以外に、複数の代表的な作物のデータを揃えて、うり類(漬物用)やなばな類のように中グループ②にまとめられる作物で登録できます。更にデータを積んで、野菜類のような大グループ①で登録することができます。グループ作物に登録のある農薬は、グループ名に含まれる個別作物に使用することができます。ただし、収穫部位や収穫時期の異なるものには使用できません。又、グループに属する新たな作物又は品種に初めて使用する場合は、事前に薬害の有無を確認してください。

注意: 個別作物のみの登録では、その作物が属する中グループ②又は大グループ①に含まれる他の作物には使用できません。

例) 「赤毛ウリ」に登録がある場合、「赤毛ウリ」には使用できますが、それ以外の「うり類(漬物用)」に属する作物には使用できません。

【参考】(農薬工業会リーフレット「農薬を正しく使って確かな収穫!」から抜粋)